



明治末期 松山犁製作所門前での記念写真<館蔵>

従業員は16名ぐらい、所主 松山原造夫妻と子供たちも写っている。門脇に当時はまだ珍しかった自転車が置かれ、奥には犁を積んだ荷車と馬もみえる。

犁部材は、入念に乾燥させるため風通し良く井桁に積み上げ^{いげた}天日乾燥した。場内奥にも積み上げた犁部材がみえる。林立した犁用材の山が犁製造の活況を示すようで松山原造も誇らしかったことでしょう。

1. 明治末期 松山犁製作所門前での記念写真 ……表紙
2. 犁製造と材木商 …………… 2～6
3. 報告事項 …………… 7～8

犁製造と材木商

学芸員 田中 壽子

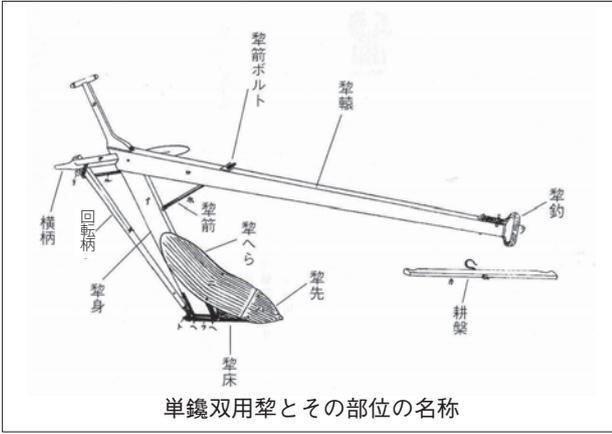
(公財) 松山記念館では、松

山株式会社創業時からの会計帳簿や創業者松山原造の日記を保管し展示しています。これらの資料をみると双用犁を試作し完成に至る経緯や特許取得後になん人々と関りながら製造と販売を拡げていったのかようすを知ることができます。

犁先と犁へらを左側へも右側へも回転できる犁、つまり往復耕ともに同一方向へ土を反転させることのできる可動犁へらをもった双用犁を発明した松山原造は、犁に単鏡双用犁と名称を付け明治三十四年十二月に特許を取得しました。その後、明治三十五年六月に小県郡和村(現 東御市和)に単鏡双用犁製作所を設立し、本格的に製造するための経営をはじめました。次第に注文が増えて量産していく中で、犁の材料である材木をどのように調達していたのか調べてみました。

犁部材の調達

考案した双用犁を製作するためには、金物として犁先と犁へら・回転装置部品・取付け金具が、また木製部として材木を加工した犁身・犁轆・横柄とロクロ加工した回転柄が必要となりました。犁先及び犁へらと回転装置に加えて犁釣り金具は、上田鍛冶町の中村六郎に製作を依頼しました。ネジなど取付け金具



衛(え)経(けい)営(えい) から買い入れました。

丸棒を使った回転柄は轆(ろくろ)加工によるもので、ロクロ屋と呼ばれる特殊な技能を持った職人が作りました。原造は上田松尾町にいた水沢というロクロ屋に回転柄を作ってもらい買い入れました。

原造は、犁の大量生産をしていくために旧来の根曲がり木の特性を生かした犁製作を改め、規格化した部材を組み立てることによって同規格の犁を完成させる犁製造に最初から取り組みました。木製部を作るための材木は、製造をはじめた明治三十四年頃は大屋 堀材木店から買入れ、明治三十六年からは群馬県碓氷村田代の仲買業者からも大量に買入れはじめたことが会計帳簿や日記をみるとわかってきました。

創業期の松山犁製作所経営環境

創業期の材木取引を述べる上で、当時の経営環境のようすを説明しなければなりません。

は上田横町の醋屋藤(南川藤兵衛経営) から、

明治三十六年になると大屋 葉鐘屋(柳澤志津

松山原造は小県郡大門村(現長和町大門)に生まれましたが、十歳の時に漢学者であった祖父篤志郎の遺言により高弟の田中新太郎に託され小県郡和村東上田(現 東御市和)で育ちました。

明治二十九年から小県郡や埴科郡の農事教師として改良農法をひろめました。ことに普及が始まったばかりの犁による馬耕の教授に力を入れ、使いやすしい犁の考案に取り組みました。明治三十三年秋に双用犁を完成させる農事教師を辞し和村に戻り、酒造や炭鉾経営などの事業家であった新太郎の仕事を手助けしつつ犁製造の準備を始めました。特許取得の後、明治三十五年六月に田中新太郎の所有地を借りて単鏡双用犁製作所を設立しました。しかし犁の販売はなかなか軌道にのりませんでした。犁の製造販売の拡がりを模索する中で、翌年の明治三十六年十月に単鏡双用犁製造販売権を伊藤商会株式会社(上田海野町)へ囑託する協約をしました。伊藤傳兵衛が上田の商業中心地であった海野町で人造肥料を扱う株式会社を立ち上げたので、その元で犁の販路を探ったものと思われれます。販売権は伊藤商会



が持ち、原造は人造肥料部の主任として月給をもらいながら、犁の製造を統括し売上に準じて特許権所有者の原造に歩合で利益が入るといふものでした。

二年後の明治三十八年九月に伊藤商会を辞し、販売囑託も解約して和村に引き上げました。明治三十九年六月には本格的な工場を新築し松山犁製作所と改名、経営環境を整えていきました。明治三十九年十二月に優良畜力犁を選定する大日本農会主催第二回懸賞募集(第一回は授賞なし)で一・二等なしの三等賞を受賞したことは、松山犁の真価が認められ広く世間に認識される契機となりました。ここから一気に受注が増えていきま



明治43年 木工場<館蔵>

右奥にこの年、アメリカから輸入した加工機械がみえる

四月八日に犁製作を和村内の大工に頼むこととし、まず清水栄三郎に快諾を得ています(後日、竹内半左工門と飯塚浅次郎を雇入れて土屋千太郎・栄三郎・吉太郎の手助けを得ている)。四月十一日に

馬県吾妻森林組合によればケヤ

犁用材

このように各部位に係わる職人を選び抜きながら犁の量産は始まっています。

四月八日に犁製作を和村内の大工に頼むこととし、まず清水栄三郎に快諾を得ています(後日、竹内半左工門と飯塚浅次郎を雇入れて土屋千太郎・栄三郎・吉太郎の手助けを得ている)。四月十一日に



明治41年6月 中村健太郎への注文控<館蔵>

村健太郎が納入するようになった明治四十年十一月からは楧を二十五銭のまま、犁轆用タラを十三銭五厘に値上げしています。

した。明治三十九年の犁販売数七〇八台から翌年の四十年には一六六五台に増えています。大正十一年には工場規模の拡張のためと犁発送や原料調達のためと、信越線大屋駅近くの丸子町塩川(現 上田市塩川元松山株式会社所在地)に工場を移転しました。

山犁製作所は移転して、昭和三十八年頃に畜力犁の生産を終えるまで材木の調達がなされました。『明量産のはじまり』

は信越線大屋駅前通りの堀材木店に用材の注文をします。五日後の十六日から材木が運び込まれました。四月十八日には松尾町の水沢というロク口屋を尋ねています。以後、回転柄が鉄製に替わる明治四十年頃までロク口屋と回転柄の取引が重ねられますがこの松尾町水沢氏を指すものと推察されます。

『明量産のはじまり』

は、一寸三分×三寸の三尺五寸または倍の長さの七尺で納められ、犁轆として使われたタラ・ニレなどは五寸四ツの五尺にして納入されたようです。納入された材木の単価をみると『自明治三十九年拾月壹日 至明治四十年九月 製作部勘定明細帳』によれば、中村健太郎の納めた楧(ケヤキ)は三尺五寸が十二銭で七尺が二十五銭、タラは五寸四ツの五尺が十二銭で取引されていました。犁身は高価なケヤキを、犁轆は雑木で安価なものを使っていたことがわかります。この単価を他の業者と比べてみると堀材木店は、三尺五寸のケヤキが十二銭五厘。いっぽう明治四十年ごろケヤキ取引を主にした上田町の小山材木店は、ケヤキの三尺五寸が十三銭で七尺が二十七銭でした。仲買人であった中村健太郎とは低価格で取引きされていたことがわかります。取引量の大半を中村健太郎が納入するようになった明治四十年十一月からは楧を二十五銭のまま、犁轆用タラを十三銭五厘に値上げしています。

犁身に使われた用材

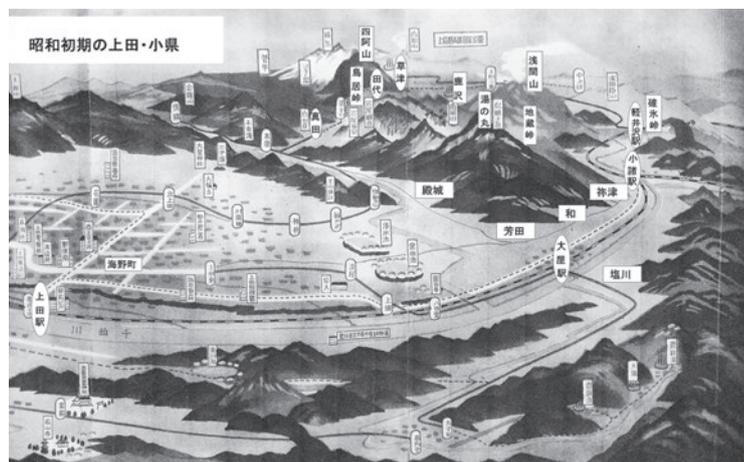
犁身は犁耕をする上で一番圧力が掛る部位です。土壌を切り進む力と犁底の摩擦や反転による犁身への負担を軽減していくことは、松山犁の改良をしていく上で重視した課題でした。「軽くて丈夫」を宣伝文句としていた松山犁ですが、犁身だけは比重が重く耐湿性や耐久性に優れたケヤキを用材として使用してきました。大正末期にはケヤキの調達が難しくなりナラが主流となっていきました。

犁轆に使われた用材

犁の操作を軽快にするために、犁轆は比重が軽く加工性が良好な材木が使われました。樹種としては、タラ・ニレ・サワラ・ツガ・カラマツなど単価の安い雑木を仕入れていたようです。大正末期になると、犁身・犁轆ともにナラが使われるようになります。

堀材木店との取引

『明治三十四年総勘定元簿』によって犁製造のはじめは堀文



『上田商工要覧』昭和31年刊<館蔵>掲載の鳥瞰図に加筆作成

之助を頼りに材木を仕入れていたことがわかります。四月十一日に手付金二円を入れ、四月十六日に犁十四挺分(七十円)の犁用材が納められています。その後五月十九日に二十挺分、十二月十九日に一一本が届き、事前に手付金として三円あるいは五円を入れて取引されています。原簿日記をみると当時から堀文之助の材木店は大屋にあったようです。帳簿には「堀文」とも記され、『材木通帳』堀材木店で屋

号として余(ヤマホ)が使われていたことが知れます。

次第に、より良質な木材を求めて地元の材木商との取引は、明治三十九年頃になると上田

小山材木店へ移行していき、取引量は漸減しました。しかしながら『自昭和四年七月 至昭和五年七月 鉄工、犁製明細帳』をみると、帝林(帝室林野管理局のこと)から約三三〇〇本

近い堀材木店に荷下ろしされていることが推量されます。堀材木店の材木置き場に保管された買付け材を丑松という運び人によって塩川の松山犁製作所まで移されていたようです。

『大正十五年 仕訳日記帳』をみると、堀喜久平(記載のママ)の名が取引先にみえます。堀文之助は後年、弟の幾久平(明治七年生まれ)に大屋の店を譲っているということですが、大正七年の帳簿に「喜余」という記載があるので、大正期中頃には幾久平が材木店を経営していたことがわかります。

昭和四年秋からの金融恐慌によって東京深川では多くの材木問屋が倒産しました。堀材木店も株価暴落の影響を受け経営難となり、その後、店を閉じてい

ます。

堀文之助

慶応三年(一八六七)昭和六年(一九三三)

堀文之助については、『和村誌』から多くの手がかりを得ました。堀文之助は、和村東深井(現 東御市和)に生まれています。元の名は袈裟平でしたが明治三十八年、文之助に改名しています。明治三十五年六月か

ら三十九年六月まで村助役をつとめ、明治四十年一月から明治四十四年一月まで村長をしました。村長在任中、明治四十一年の内務省令による神社合併を積極的に進め、小県郡では類例がないほど徹底した和神社への合祀を成し遂げた人でもありません。明治四十三年には、和尋常高等小学校に村費で新制高等三年を設けました。県下でこのころ高等三年を置いたのは、長野県師範学校付属小学校を除いては南信の赤穂、東信の小諸・和の三校だけでした。帝国大学や早稲田大学などの卒業生を教員として迎え、小県郡内の他村からも生徒が通うほど先進的な教育を進めました。大正六年から昭和六年四月までは、学務委員となり和村学校教育を監理しました。

文之助がどのような経緯で材木商として財を成したのか堀家に語り伝えられていません。東深井には文之助が建てた屋敷が今も残り、上質な材を羽振りよく用いた重厚な造りの主屋は、往時を追想します。

堀文之助の曾孫となる文和氏(現当主)によると、文之助の父は利右衛門といい、後に文之助を名乗っているそうです。「文之助」は代々継承する名跡だったようです。利右衛門の兄弟に和小学校(明治十二年建)建設に棟梁として采配した寿吉がいたそうです。和小学校の棟札には、棟梁の堀寿吉とともに大工の名も連なっていますが、堀字作・堀袈裟吉の名前があることから堀一族には、大工を業とする人もいたようです。こうした縁故もあって材木の商いを始めたのかも知れませんが、残念ながら創業の経緯にたどりつけませんでした。

明治二十六年、信越線が碓井峠の開通により関東と結ばれ、明治二十九年には地元の請願によって上田駅と田中駅との間に大屋駅が開設されました。これによって優良な材木を豊富に産する群馬県に鉄道がつながりました。文之助は鉄道の貨車を

使つて産地から材木を買い入れることに目を付けたのでしよう。大屋駅前通りの上田に向かつて二百メートルほど先に店を構え、店の裏の千曲川沿いに広い材木置き場を持ったようです。昭和二十四年に堀家に嫁いだ葉磨子さん（文和氏の母）は、軽井沢から碓氷峠を越えた群馬県あづまがの安中からも材木を買い付けていたと伝え聞いています。堀家は和村深井では、「木屋」とよばれてきました。

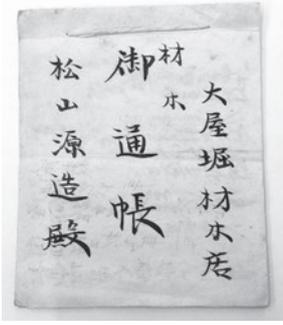
中村健太郎との取引のはじまり

明治三十八年ごろから多量な犁用材を納めていた人物に婦恋村田代の中村健太郎がいます。

原造の日記を追って、中村健太郎との取引の始まりを探してみました。『明治三十六年 松山原造日記』一月によくやくその初めを見出すことができました。「二月十二日 田代ヨリ材木



堀 文之助の肖像写真
＜堀 文和氏 所蔵＞



大屋 堀材木店の通帳＜館蔵＞
明治39年1月～9月

売二来ル」突然、田代から材木を売りに来た人がいると記しています。丁度この日は、近所の青木利重とこれからの材木調達について話したところだったと書いています。この日、材木買付けの約束をしたのでしよう。「二月二十六日 午後九時田代中村健之助（二月二十八日の来訪者欄は健太郎に訂正している）ヨリ犁用材木来リタリシ」

の天候について「未明から一日中わずかずつの降雪があり、夜になって凍った」と記しているので、雪道で材木を載せた荷車が難渋して遅く到着したかもしれませ

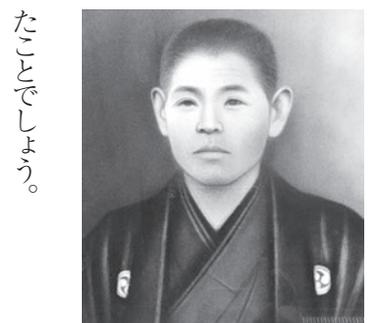
「二月二十八日 夕方中村健之助氏来リ 兎一頭ヲ土産トシテ頂キタリ 夕飯后十一時全人ヨリ犁用材ト全人所有板板共三台着荷セリ」二十六日に先ず材木が届き、翌々日の二十八日の夕方に中村健太郎が兎を土産に持ちながら現れたあと、晩遅く十時に三台の荷が届いています。「三台の荷」はじめ、人が牽く荷車かと推量しましたが、後述する検証から馬に牽かせた荷車のごようです。原造はその日



堀 幾久平＜『昭和4年大屋橋開通記念 写真帖』より＞
神川村村会議員として大屋橋竣工にも尽力した

にある鹿沢温泉は江戸期には津領だったところだ。中村健太郎との取引は湯の丸高原を越えた身近なところだったよう

因みに二月二十八日に持参した兎は、二月五日に氷豆腐の製造作業をしたあと原造は兎を潰して、作業を手伝ってくれた豊三郎と調理したそれを肴に酒を呑んでいます。届いた材木は、帳簿によるとタラ五十九本代として五円九十銭を支払ったことになってい



中村健太郎の肖像写真
＜中村輝一氏 所蔵＞

たことでしょう。

この後、八月十一日には槻六〇本とタラ五寸四ツを二七二本。十二月十四日には槻七尺が一〇五本持ち込まれています。犁身材料としての槻と犁轆材料としてのタラを大量に中村健太郎を通して仕入れ始めたことがわかります。

中村健太郎の配送ルート

婦恋村田代と和村のある小泉郡との商業交易は、江戸期から鳥居峠を越えて行われてきました。上州街道とよばれるこの道は、群馬県高崎から榛名・吾妻を経て上田に通ずる重要な交易

り出す柚たちには、作業の節目には樽酒が振る舞われていた（『婦恋村の民俗』より）ので、中村健太郎も帰り荷に酒樽を四斗も積んで戻るのは、もっつけの幸いだっ

上州側の田代は、鳥居峠を越

えた信州側の渋沢・大日向(現上田市真田町長)とともに交易の中継地であったようで、炭の仲買が天津などからも来たそう

材木の仲買人として

中村健太郎は自分の持ち山から木を伐り出して、松山原造に材木を納めたのでしょうか。どのような仕事をしていった人物なのか調べてみました。

田代で中村健太郎の子孫に尋ねあたりました。曾孫にあたる輝一氏は、松山製材所に先祖が用材を納めていたことを伝え聞いていました。中村家は昔から畑作をしていて、樹木を伐る仕事はしていなかったそうです。中村健太郎は嘉永六(一八五三)年に生まれ、昭和八年三月に七十歳で没しています。健太郎はどのような経緯で材木の商



大正期 北安曇郡大町(現 大町市)ナラ材伐採の様子。「松山製材木伐採地」の標記がみえる<館蔵>



昭和5~7年ごろ 縣村西海野(現 東御市本海野)田口製材場<館蔵>

いを始めたのでしよう。地誌から背景を探ってみました。

『上野国村誌 第十一卷吾妻郡』によれば明治十年の田代には三六五人が住み馬鈴薯・そば・粟・ヒエ・繭(『婦恋村の民俗』

には田代は冬仕事に炭作りをしたとある)を作り暮らしていたようです。他の集落と際立って異なるのは牛十二頭とともに馬九十三頭が飼われていることです。少ない農産物量に比べて馬を多く持っているのです。隣の干俣では冬仕事として木挽きをし、年間に九〇〇枚の板を産し馬も一五〇頭飼育していました。

『婦恋村誌』によると婦恋村の中心地であった大笹は明治期、近くの干俣とともに板や鋏柄の生産が盛んだったそうです。田代は鳥居峠の麓にあつて大笹や干俣で産した板や鋏柄を信州に

運ぶ馬方稼ぎを農業のかたわらしていたものと地誌などから推測します。このような背景から、中村健太郎は大笹や干俣の人々が冬仕事に生産した板材を売り捌く仲買人として松山製材所に用材を納めていたものと思われま

明治三十六年一月から始まった中村健太郎との取引は、帳簿の記載から大正九年五月までしていたことを確認できました。

大正七年ごろになると丸通(内国運連会社)が犁の輸送だけでなく材木の搬送も請け負うようになり、中村健太郎は犁材の運搬を兼ねた仲買人から、材木取引を専業する仲買商に替わっていったと帳簿から推量されます。

小山材木店

明治三十八年ごろからケヤキを中心に納めた材木商に小山材

木店があります。地元での用材調達

は堀材木店から小山材木店に移行し、大正期

中頃まで取引されました。帳簿の運搬料

などから推し量ると小山材木店は上田に

あつたと思われま

すが、明治・大正期

の上田商工業者名簿を調べても探しあたりませんでした。

原造との取引のきっかけは帳簿に見出すことができました。

『自明治三十八年九月 庶差引明細帳』に小山材木店の記載頁の右上に「青柳口 小山材木店」とあり、この青柳口というのは

同年の別の帳簿記載から上田馬場町の青柳辰次郎という製材作をしていた大工の斡旋であることがわかりました。

大正八年十二月から東京都芝区田村町の◎小山材木店(小山寛治経営)との取引が始まります。上田の小山材木店と関係するの、判明しません。

その後の取引

大正十一年八月から富山周太郎(群馬県沼田)との取引が始まり、その後富山の取次により須田徳太郎(所在は不明)や帝林(帝室林野管理局のこと)から用材が入るようになりま

す。また大正十五年秋から下高井郡の宮川時次郎によって中野

や湯田中から材木が納入されました。大正十五年六月から北安

曇郡大町の宮尾良政との取引が始まります。当時の仕訳日記帳

を読み解くと、宮尾良政はナラを伐り出し、鉄道で搬送された

ものが大屋駅近く縣村西海野(現 東御市本海野)の田口材木店に下ろされ製材をしていたことがうかがわれます。

用材は乾燥によって強度が増すので、各部位に加工された後も乾燥に時間をかけました。松

山製材は全国に三十万台普及しましたが、入念な乾燥を必要とする用材は計画的に搬入され、貯材して製造に備えていました。(文中 敬称略)

参考文献

『松山原造翁評伝』

昭和二十九年 岸田義邦著

『松山のあゆみ』

昭和五十二年 松山株式会社

『婦恋村の民俗』

昭和四十八年 群馬県教育委員会編

『婦恋村誌 上巻』昭和五十一年

『上野国郡村誌 第十一卷吾妻郡』

昭和六十年 群馬県文化事業振興会

『和村誌』昭和三十八年

『東深井区誌』昭和五十年

『真田町の街道とくらし』平成六年

『年表でみる大屋の歴史』平成元年

『大屋橋開通記念 写真帖』

昭和四年

『有用木材の性質及用途』

昭和四年 田中勝吉著

『上田商工要覧 一九五六』

昭和三十一年上田商工会議所

平成29年 記念館日誌

月日	曜日	内容・実施事項
1/24	火	平成28年度、会計及び業務監査
1/24	火	電機設備の定期調査 (中部電機保安協会)
2/8	水	第11回理事会
2/15	水	松本市立博物館より「年報2015」受贈
2/23・24	木・金	平成28年度博物館等関係職員研修会 (千曲市 長野県立歴史館)
2/27	月	第7回評議員会
2/28	火	第12回理事会
3/6	月	図書受贈「信濃国の城と城下町」 長野県立歴史館より
3/9	木	長野県知事宛 「事業報告等に係る提出書」提出
4/3	月	松山(株)新入社員研修来館
4/7	金	松山技研(株)新入社員研修来館
4/23	日	松山武理事長ご逝去 (71歳)
4/29	土	第4回全国馬耕大会(はたらく馬フェス) 後援、参加 (写真1、2、3)
5/22	月	長野県立歴史館より刊行物の受贈 ・信州の風土と歴史23「川」 ・長野県立歴史館「研究紀要」第23号 ・近代村絵図・地図の世界 「明治の地図はどうつくられたか」 ・長野県立歴史館収蔵文書目録16

月日	曜日	内容・実施事項
5/25	木	第8回評議員会
5/25	木	第13回理事会
5/30	火	日本のあかり博物館より 「館報第72号」受贈
5/30	火	長野県教育委員会宛「青少年を対象とした取組等に関する実績報告」提出
5/30	火	農山漁村文化協会より季刊地域No29 「むらの仕事のカタチ」受贈
6/1	木	平成29年松山(株)新入社員出前研修
6/20	火	「写真アルバム上田・千曲・東御の昭和」 受贈 (株式会社 いき出版より)
6/21	水	下高井農林高校へ図書等寄贈
7/1	土	米熊・慎蔵・龍馬会 平成29年度総会出席
7/7	金	岡谷蚕糸博物館及び、旧林家住宅他 視察研修会 (松山記念館役員参加) (写真4)
7/25	火	井関農機(株)新入社員研修来館
8/7	月	下伊那農業高校へ図書等寄贈
8/28	月	長野県立歴史館より企画展 「長野県誕生一公文書・古文書から読みとくー」受贈
10/18	水	館報「まつやま」第26号発行
10/20	金	第26回文化講演会



(写真1) はたらく馬フェス 第4回全国馬耕大会にて
八王子市高尾の森 (4月29日)



(写真2) はたらく馬フェス 出前授業



(写真3) 馬耕大会のようす



(写真4) 岡谷蚕糸博物館での研修 (7月7日)

文化講演会開催

平成二十八年十月十四日(金)松山記念館主催、上田市・上田市教育委員会後援で、松山(株)三階ホールにて、第二十五回文化講演会を開催しました。

講師に、長野県林務部森林政策課 井出政次氏をお願いし、演題『みんなで支えるふるさとの森林づくり』「森林・林業から見た「信州の山」の魅力と恩恵」をテーマとして講演された。

(聴講者一四三人)
講演会に先立ち、主催者を代表して松山武理事長が挨拶に立ち、今



講演会のご後援をいただいた上田市、上田市教育委員会とご多忙のなか本日の講演をお引き受けいただいた講師にお礼の言葉を述べると共に本日の講演のテーマに寄せて「木材エネルギー利用」というと、六〇年前に見た木炭バスを思い出す。今回の講演では、もっとスマートで新しい技術を用いたエネルギー利用の話が聞き

きできると期待している」と述べた。

続いて後援者を代表して上田市九子地域自治センター産業観光課の横井久一課長は、地域農業の現状、課題を指摘しつつ、長野県は全国的にもワイン用ぶどう栽培の適地として注目されているとし、九子地域で

大手ワインメーカーが栽培している「梔子ヴィンヤード」が先の伊勢志摩サミット(先進国首脳会議)の夕食に提供されたことなどを紹介し、

雨が少なく晴天率が高い、豊かな生態系があるなど様々な地域特性を活かしながら、未来に向け新たな研究を進めていく必要があると述べた。

続いて講師のプロフィールが紹介され、講演に入った。

講演で井出氏は、初めに長野県の美しい山々を紹介するビデオ映像を上映したあと、長野県が平成二十六年に制定した「信州山の日」(七月の第四日曜日)の取り組み、今年から国民の祝日となった「山の日」(八月十一日)の制定、県林業が抱える課題、木質バイオマスの利用等について話を進めた。

(講演要旨)

- 一、「信州山の日」の取り組みについて
- ・長野県の「山」の魅力・価値・課題
- ・制定に検討経過
- ・「信州山の日」の骨子
- ・制定を契機とした取り組み
- ・平成二十八年の「信州山の日」関連の主な取り組み
- 二、長野県が進めている「木の文化の再生」
- ・日本は森の国
- ・戦後、建築物は非木造化へ
- ・木の良さの確認
- ・木造利用の扉開かれる
- ・失われた六十年、木の文化の再生に向けた挑戦

三、木質バイオマス利用の促進について

- ・木質バイオマスを利用することの意義
- ・県内の木質バイオマス利用ポイラ導入実績
- ・独創的な取り組み
- ・バイオマス利用先進国オーストリアでは
- ・木質ポイラ導入のための五つの原則

木質ストーブ利用実態調査結果最後に、木質バイオマス利用に触れ、森林資源の循環作用(植える↓育てる↓伐る↓利用する↓植える)によって循環可能な資源として利用できること、中東から輸入する石油に代わって、地域の木材を利用することで地域経済の活性化に寄与すると強調された。

ご清聴ありがとうございました。

理事会開催

- ★平成二十八年十二月六日(火)協同サービス(株)二階ホールにおいて、第十回理事会が開催され、
- ①平成二十九年事業計画書(案)・同収支予算書(案)について審議され、出席者全員の承認を得た。
- ②その他報告事項承認。
- ★平成二十九年二月八日(水)協同サービス(株)二階ホールにおいて、第十一回理事会が開催され、
- ①平成二十八年事業報告書(案)及び事業報告の付属明細並びに同収

支決算書(案)及び財務諸表等を、監事による会計監査報告の後審議され、出席者全員の承認を得た。

②理事・監事改選の件
理事全員及び監事一名が次回の定例評議員会の締結時に任期満了になる。

よって、理事七名全員と監事の一

名再選重任をお願いして了解を得て、次回評議員会に上程することとした。

- ③定例評議員会の招集について
平成二十九年二月二十七日(月)協同サービス(株)二階ホールにおいて、開催を可決承認。
- ④その他報告事項承認。
- ★平成二十九年五月二十五日(木)協同サービス(株)二階ホールにおいて、理事会が開催され、代表理事松山武氏辞任により、先の評議員会において選任された理事松山久氏及び理事全員の互選により松山久氏を代表理事に選任した。

評議員会開催

- ★平成二十九年二月二十七日(月)協同サービス(株)二階ホールにおいて、第七回評議員会が開催され、
- ①平成二十八年事業報告書(案)及び事業報告の付属明細並びに同収支決算書(案)及び財務諸表等を、監事による会計監査報告の後慎重審議され、出席者全員の承認を得た。
- ②評議員七名が本定時評議員会の終結の時に任期満了になる。勝野和人氏は本人の要望もあつて退任、新

任に西野入政典氏、他の評議員六名が再選重任された。

③理事・監事改選の件
理事全員及び監事一名が今定例評議員会の締結時に任期満了になるため改選を行った。

理事七名全員が再選重任、監事一名が再選重任された。

- ④その他報告事項承認
- ★平成二十九年五月二十五日(木)協同サービス(株)二階ホールにおいて、第八回評議員会が開催され、松山武理事辞任により、新理事に松山久氏を全員異議なく承認した。

松山(株)新入社員の研修見学

松山(株)の平成二十九年新入社員は、四月三日(月)の入社式終了後、当館を訪れ、松山(株)創業以来の稗及び犁の歴史を研修した。

平成二十八年当館見学者

開館日数 二八七日
見学者総数 六四〇人
(内訳)
県外(含む外国) 八四・七%
東信 一二・五% 北信 一・九%
南信 〇・六% 中信 〇・三%

第二十六回文化講演会決定

日時・平成二十九年十月二十日(金)
場所・松山(株)三階ホール
講師・長野県短期大学 教授
中澤 弥子 氏
演題・「伝えよう 育てよう 信州の豊かな食文化」